

# 今やらねば

田中館愛橘の生涯

19



## 【50年後の夢】

### 減災訴えるメッセージ

「TSUNAMI」は、いまや国際語となった。現在生きている日本人が初めて経験したマグニチュード9.0の東日本大震災から丸3年になる。

2011（平成23）年3月11日、突如として襲った未曾有の地震と津波。東北地方の太平洋沿岸地域では、人々の生活が一変した。町が、村が消えた。津波火災という言葉が生まれ、原発による放射能被害は計り知れない。

ここに、一つの文章がある。

〔略〕…今、多くの国民が、同じ人間たちを敵として戦うために、たくさんな費用をかけて軍備に励んでいる。これらを差し控えて、自然の敵なる地

震、雨風の大嵐や津波等に向かって戦いをいどみ、これらを征服したらどんなに世界が楽になることだろう！（略）東日本大震災後に書かれたとも思える、とても平明な文章である。地震、台風などの過酷な自然現象の研究による、「減災」と人々の安全・安心な生活を訴えている。

しかし、これは1952（昭和27）年、『電波時報』6月号に載ったローマ字書きの随想だ。

書き手は、日本いや世界における震災予防、減災研究の先駆者・田中館愛橘博士である。田中館は、この年5月21日に没したので、公の文章としてはこれが絶筆となった。

文章のタイトルは「GOZYUNEN NOTI NO YUME」。

この「50年後の夢」が書かれて59年後、2011年に東日本大震災が発生した。本連載の第9回「濃尾大地震編」で、「震災研究の土台をつくる」として田中館の偉大な業績を紹介したが、いま一度振り返ってみたい。



故郷の福岡町で行われた「田中館博士のお話を聞く会」に集まった子どもたち。愛橘（中央）の右隣が筆者=1951（昭和26）年9月

地震・津波に幾度となく見舞われてきた日本の研究対策は、約120年前の濃尾大地震が契機となった。調査で見たあまりの惨状に田中館は国家的研究機関の設立を提起し、世界初の震災予防調査会が設置された。現在の全ての防災・減災研究の原点を立ち上げたのが田中館なのだ。

### 【ミニコラム】小学生に残した言葉

#### 地元でお話聞く会

田中館愛橘は科学大衆化・啓蒙（けいもう）の先駆者だった。亡くなる前年の1951年、地元・福岡町で「田中館博士のお話を聞く会」があった。小学生たちに田中館は次の言葉を残した。「科学でも何でも、諦めては駄目だ。世界を相手にして、最後まで頑張ることが大事だ。だが自分だけ一人偉くなっていけばよいなど勝手な考えでは困ったもんだ」。他の人も同じに向上させ、力を合わせる事が大切だと諭した。

「50年後の夢」は、日本国民いや人類に宛てた地球物理学者・田中館愛橘95歳の、人類愛に満ちた強烈なメッセージである。

（菅原孝平 田中館愛橘会副会長、二戸歴史民俗資料館長）

※この内容は、デリーー東北2014（平成26）年3月10日号に掲載されたものです。